北海道医師会役員

就任のご挨拶

常任理事就任のご挨拶

常任理事
札幌医科大学医師会
札幌医科大学医学部
遺伝医学　教授
櫻井　晃洋

このたび10年以上にわたって担当されていた渡邉直樹教授（臨床検査医学講座）の後任として北海道医師会常任理事を拝命いたしました。長く大学に身を置いて医師会活動の経験がなく、かつ遺伝医学という基礎と臨床の狭間に位置する領域を専門としております上に、まだ北海道人になって一年余りしか経ていない私がこのような重責を仰せつかり、大変不安ではございますが、諸先生にご指導をいただきつつ学んでいきたいと考えております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

多くの先生方には初めてのご挨拶になりますので、この紙面をお借りして簡単に自己紹介をさせていただきます。私は新潟県に生まれ、地元の県立高校を経て新潟大学に入学いたしました。卒業と同時に母校の検査診断学教室にお世話になり、翌年からは内分泌学を学ぶために信州大学に籍を置きました。卒後３年半で、まだ学位もなく筆頭論文も書いていない状況でシカゴ大学に４年間留学させていただきました。この６月に留学時代の恩師の受賞パーティーのためにシカゴに行きましたが、何の実績もない若造を送りだしてくださった信州大学の先生方を含め、この時期に人生の師匠とも言える多くの先生方に巡り会えたのはまさに「縁」と「運」であったと実感します。シカゴ大学では甲状腺ホルモン受容体の分子生物学的研究に取り組み、甲状腺ホルモン不応症の分子遺伝学的機構を明らかにしました。

帰国後は、甲状腺疾患に加えて遺伝性内分泌腫瘍にも興味が広がり、これは現在に至るまで私の最も重要な診療・研究課題となっています。また信州大学では1996年に全国に先駆けて遺伝子診療部が発足しましたが、私は発足当初から17年間にわたり、遺伝子診療部の整備・運営と診療、教育にかかわってきました。今回は遺伝医療と遺伝医学教育を充実させるという方針のもと、2013年４月に新設された札幌医科大学医学部遺伝医学にご縁があって着任いたしました。

これまでの遺伝医療は主に小児科、産科が中心の領域でした。もちろん新しい命をはぐくむ医療分野としてその重要性は今後も変わりません。一方で遺伝医学の進歩に伴い、あらゆる領域の一般診療で遺伝情報が不可欠となってきました。またゲノム解析がより安価で迅速になるのに伴い、遺伝医療が現在のように特定の遺伝子や染色体の情報を扱うものから、全ゲノム情報とその発現情報を扱うものへと変貌していくことは確実であり、新たな遺伝医療体系の構築が求められると同時に、これからはすべての医療者が遺伝医学マインドを備えることが必要とされます。

私は新潟で医師にしていただき、信州で専門家に育てていただきました。次の段階として、北海道で遺伝医療の体制整備と人材育成を進めるべく着任いたしましたが、このたび北海道医師会常任理事という新しい責務をいただきました。これまでの私自身がそうであったように、医師という共通の専門職集団の一員でありながら、アカデミアに身を置くものにとって、医師会という存在はなかなかその意義が分かりにくいものであることは否定できません。北海道医師会の常任理事として、アカデミアと医師会をつなぎ共に発展していくために、微力ながら少しでも医師会ならびに会員の先生方のお役に立てるよう努める所存です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

理事就任ご挨拶

理事
帯広市医師会
いなば内科呼吸器科　院長
稲葉　秀一

このたび、道東ブロックから前帯広市医師会会長堀　修司先生の後任として、理事に選任されました稲葉です。

平成17年から帯広市医師会理事を務め、今年５月19日に同会会長に就任いたしました。この間、北海道医師会の委員としては医療政策等検討委員会委員、医報通信員、予備代議員としてその活動を勉強させていただきました。これからは、道医師会執行部の方々と意見交換しながら地域の実情を具申し、そこでの情報を地元医師会に還元し、地域医療の充実に向けて力を注ぎ、少しでも北海道の医療環境の整備にお役に立てるよう仕事をして参る所存です。

交通網の整備が進んだことと多様化したニーズもあり、複数の医療機関に通院する患者さんが多く、市町村の垣根を越え、さらには医療圏をも越えているのが実情だと思います。これに対応するには、地域住民の目線に立っての新しい形での医療連携の構築が求められます。帯広市医師会では十勝医師会の協力も得て、十勝管内の医療機関がインターネットを通じて診療情報を共有する「十勝メディカルネットワーク（通称：はれ晴れネット）」を、今年３月より68医療機関で稼働開始しております。これにより、市内６基幹病院に通院している患者さんの診療情報を、いち早くかかりつけの診療所でも把握できるようになり、診療の質の向上に役立てています。しかし、その運用はまだまだ不十分で、さらなる利便性の向上に向けて整備しているところです。

そのような中、このたび道医師会の理事に就任することになりました。より良い医療環境を整えるべく、長瀬会長の下、努力していく所存です。

皆様のご鞭撻をお願いします。

理事就任ご挨拶

理事
旭川医科大学医師会
旭川医科大学医学部
精神医学講座教授、
学長補佐（メンタルヘルス担当）
千葉　　茂

飯塚　一先生（旭川医大理事・副学長）が本年６月末日で退官なさったため、その後任として北海道医師会理事に選任されました。何卒よろしくお願い申し上げます。

私は、1979年（昭和54年）、旭川医大の第一期生として卒業いたしました。卒後、母校の精神医学教室に入局するとともに大学院に進みました。大学院では、幼若ラットへの低酸素曝露がその後のてんかんの要因になりうることを脳波研究で明らかにしました。以来、私は精神神経疾患、特にてんかんと睡眠についての脳波研究を旭川医大精神医学教室で行ってきました。長期海外留学としては、世界的に有名な医師･脳科学者であるJuhn A. Wada教授（カナダブリティッシュ・コロンビア大学、北大精神科同門会員）のもとで学ぶ機会に恵まれました。この留学を通じて、国内外のさまざまな学問分野の人々と交流できたことは、今も私の大きな財産となっています。また、医学部卒業以来、北大ならびに札幌医大の諸先生から多大なご指導をいただいたことに心から感謝しております。

さて、私が医師になった35年前は、精神科医療は今と比較するとかなり遅れており、精神科治療薬も数えるほどしかございませんでした。その後、科学技術の急速な進歩によって脳科学が発展するとともに、脳疾患や精神疾患に対する治療法も飛躍的に進歩しました。一方、ストレスに関連する精神障害やうつ病、認知症をもつ患者が社会に急増してきました。ご承知のように、最近、厚生労働省は、地域医療の医療計画に盛り込むべき疾病として、従来の４大疾患（がん、脳卒中、急性心筋梗塞、糖尿病）に精神疾患を加え、新たに「５大疾病」という考えを導入しました。

このような社会の変化を踏まえると、精神科医師としての役割の重さを痛感せずにはいられません。最近、睡眠障害の治療が、生活習慣病を予防したり、こころの健康維持・向上にとってきわめて重要であることが分かってきました。このような新しい睡眠医学の観点から、道民の皆様の健康に役立つ仕事ができれば幸いに存じます。

結びに、今後とも本会会員の諸先生にはご指導ご鞭撻いただきますよう何卒よろしくお願い申し上げます。